日中戦時下における宮澤賢治テクストと『萬葉集』の受容

――その接点と差異を視座として――

張　永嬌

はじめに

日中戦時下における日本文化の宣伝と評価に際しては、「日本主義・日本的なもの・日本の伝統・日本精神・国民的なもの・国民精神」といったフレーズがしばしば提起される。また、「伝統と古典への回帰」という理念が前景化されていた中で、『萬葉集』・「萬葉精神」は、その代表／象徴／指針と見なされ、植民地経営の文化政策・言語政策、さらに皇民化教育のために、被占領地で流布されていた。

戦時下の中国における日本文化の受容という系譜の中で、萬葉重視・『萬葉集』受容と類似する現象として、宮澤賢治の受容のされ方も多様で活発であった。しかし、宮澤賢治研究において、一九九〇年代以前には「宮澤賢治と戦争」というテーマはあまり論及されてこなかった。一九九〇年代以降の研究では、戦時下の宮澤賢治受容の諸相（映画・詩歌・童話）が浮き彫りにされている。だが、文学が政治に巻き込まれたこれらの現象について、どのように受け止めればいいのか、この点については一考の余地がある。

本稿では、宮澤賢治テクストと『萬葉集』の受容が戦争とどのように関わっていたか、そしてその受容のされ方の接点と差異を検討してみたい。『萬葉集』と「雨ニモマケズ」は、同じく銭稲孫によって、戦時下という特殊の政治空間で中国語に翻

訳され、中国で読まれていた。植民地における文化政策の一環として、日本語教育が実施される際に、『萬葉集』と「雨ニモマケズ」は同じく教科書に掲載されていた。

戦時下に活躍していた草野心平・小田邦雄・松田甚次郎・保田與重郎・銭稲孫・周作人などの文筆活動によって、『萬葉集』も宮澤賢治テクストも、変容しながら継承され続けている。彼らの論調は「大東亜共栄圏」建設の理論的な正当性の補強としても機能していた。本稿ではこのような現象を整理しつつ、戦時下における日本文化の越境と受容、その過程に包含される「文学の機能」と「受容の力学」を考え直してみたい。また、このような戦時下の文化交流の記憶と遺産は、戦後にどのように継承され、あるいは抹殺されたか。この問題は日本のみならず、中国の研究者も直視しなければならない課題と思われる。

戦時下における『萬葉集』の受容については、日本文学報国会[1]によって選出された『愛国百人一首』を避けて議論することはできない。『愛国百人一首』は、日本文学報国会が情報局や大政翼賛会の後援、毎日新聞社の協力のもとに企画したものである。選定委員[2]や選定顧問に佐佐木信綱をはじめとする短歌の専門家が多数就任した他、情報局・大政翼賛会・文部省社会教育局・同省国語局・陸軍省・海軍省・報道部・放送協会などの関係者も関与していた（『定本愛国百人一首解説』「凡例」）。毎日新聞社が全国から募集した推薦歌に加え、日本文学報国会短歌部会の幹事、及び選定委員の数名により提出された推薦歌の中から、前後七回にわたって審議の上、慎重に厳選された百首が、一九四二年一一月に発表され、一九四三年三月に毎日新聞社によって『定本愛国百人一首解説』として刊行された。合計百首の内二十三首が『萬葉集』から選出された。

本稿はこの二十三首の歌を中心に、同じく戦時下に広く流布されていた宮澤賢治の「雨ニモマケズ」をはじめとした文学テクストとの比較検討を行う。二十三首の萬葉歌と「雨ニモマケズ」を中心とした賢治テクストに対して、戦時下においてどのような読みのモードが付与されていたかを、その共通点や差異、そして文学と政治の関係性といった切り口より考察する。

一　国家との接続

この『愛国百人一首』は各種新聞に大いに宣伝されるとともに、ラジオ放送・歌・詩集・解説集など多様な形で受容された。戦時下における『萬葉集』には「愛国歌」の代表へとシフトされていくというプロセスが見られる。『萬葉集』に愛国精神の代表的な歌集という新たな意味が付与されたのである。戦時下の宮澤賢治と彼のテクストや『萬葉集』の受容について、その接点に注目する際に、まず特徴として浮かび上がる点は国家との深い関連性にある。また、『愛国百人一首』の選定の前提について、日本という国が「皇国」であり、天皇の国であることを明言している。その選出された『萬葉集』の中にも「天皇」に関わるものが多い。

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも　柿本人麻呂

出典：萬葉集巻第三巻頭に出て居る。（国歌大観番号二三五）

やすみししわが大君の食国は大和も此処も同じとぞ念ふ　大伴旅人

出典：萬葉集巻第六に出づ。（国歌大観番号九五六）

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御盾と出で立つ吾は　今奉部與曾布

出典：萬葉集巻第二十防人歌中に出づ。（国歌大観番号四三七三）

大君の命かしこみ大船の行きのまにまに宿りするかも　雪宅麻呂

出典：萬葉集巻第十五に出づ。（国歌大観番号三六四四）[3]

これらの歌句は文化が政治に影響する一面を表している。『小学国語読本』尋常科用巻五（国定第四期国語教科書）に多く掲載されている建国の神話も、個人の「国民」という身分に対する認定、国のために戦争に出ることを賛美する歌、国のために犠牲となった人間に対する慰霊とその神格化など、いずれも詩歌と国家の密接な関連性を映し出している。詩歌が国家共同体を賛美し、個人が詩歌を詠むと同時に、国家への奉仕という精神的なスローガンも宣言させているのである。

一方、宮澤賢治の文学テクストも日中戦時下において経典と称され、滅私奉公のスローガンとして読まれてきた。宮澤賢治の弟子・松田甚次郎（一九〇九～一九四三）が一九三九年三月に出版した『宮澤賢治名作選』の後記には、以下のことばがある。

私は若くして逝かれた恩師宮澤賢治先生の霊が、強く、強く我が芸術を、わが農村を、我が国家を護つていることを深く信ずるものである。[4]

品田悦一は、「国文学は愛国心の喚起という任務を宿命的に背負わされている」[5]と論じているが、宮澤賢治の文学も「国家」を護る責務を背負わされていることは以上の文言から明確である。その象徴的な表れの一つが、「雨ニモマケズ」が「国民詩歌朗読運動」のなかで「優秀詩歌」とされ、一九四二年三月に日本精神の詩的昂揚のために刊行された大政翼賛会文化部編の『詩歌翼賛』朗読詩集にも収録されたことである。宮澤賢治テクストも、戦時下には「国家」と密接な関係にあったことが窺えよう。

宮澤賢治テクストと『萬葉集』の戦時下受容の接点の一つ目は、国家との接続である。両者とも、日本という国の精神の代表として賞賛され、詩歌・民謡・朗誦によって一体感を高め、集団心性を喚起するために使われていたのである。

二　伝統へのこだわり

伝統へのこだわりも、両者の受容の中にある共通点である。長谷川如是閑は、近代的教養の発達した時代の必然として起こった古典復興に伴った現象として、明治後期に萬葉調が復活し、さらに一層自由な形や言語を持つようになると指摘し[6]、萬葉調の復活を古典復興のシンボルとして論じている。同じように、宮澤賢治の作品を『萬葉集』のような古典作品として見なす詩人がいる。谷川徹三は『雨ニモマケズ』という評論の中で、以下のように述べている。

この詩を私は、明治以後の日本人の作つた凡ゆる詩の中で最高の詩であると思つてゐます。（三頁）

（上略）論語とか、老子とか、萬葉とか、芭蕉とかかういふ永遠の書物に就いては、昔は分つたと思つてゐたことが、五年十年を経て読み返して見ると、あの時は本当には分つてゐなかつた。（中略）これが古典の真に古典たる所以であると私は信じてをります。さういふ古典として明治以後の文学のどれだけが遺るかを私は疑ふものでありますが、賢治の作品が、さういふ古典として遺るといふことは、私は今日では聊も疑つてをりません[7]。（二一頁）

谷川は明治以降の文学の中で、古典として残せるものが宮澤賢治の作品である、と評している。何をもって古典と見なすかの基準が曖昧であり、「永遠の書物」とはどのようなものなのか、その評価の基準は時代によってさまざまだが、戦時下という特殊な空間では、伝統や古典といった広義的なものが「日本的なもの」として強く打ち出されたのである。藤井青銅は伝統に関する法則を羅列し、「人は自分がいま見ているものが、開始当時から不変のまま続いてきた伝統だと／誰かにメリットがある伝統は長く続く／発信側にメリットがある伝統は長く続く[8]」、と整理している。

「萬葉精神」と宮澤賢治の精神は、「伝統」や「古典」として「聖化」させる中、象徴的・観念的な精神性が過剰に強調された。結果的に、読者の抽象的な憧憬と帰属意識を喚起するための装置として、戦時下の国策団体は両者の精神性を過剰に強調し、その精神性が形成される歴史的な経緯やテクストの内実を掘り下げないままにしている。

三　翻訳と越境の志向

「雨ニモマケズ」は、宮澤賢治の手帳に書かれた、本来は公表される予定のなかった私的なメモで、彼の心象スケッチとして有名である。一九四一年四月に銭稲孫によって北京近代科学図書館編の『日本詩歌選』に掲載された際、その作者紹介欄では宮澤賢治を以下のように紹介している。

宮澤賢治　詩人。明治二十九年生於岩手県、昭和八年歿、年三十八歳（一八九六―一九三三）。著作有「宮澤賢治全集」六巻、十字屋書店刊行。[9]

十字屋書店版の全集は一九三九年から一九四四年にかけて全六巻・別巻一で刊行された。刊行途中の一九四一年に「雨ニモマケズ」が『日本詩歌選』に収録されるようになっている。その前も一九三九年に松田甚次郎が『宮澤賢治名作選』を出し、同年に福田清人の『文部省推薦開拓文学叢書　日輪兵舎』（朝日新聞社、三七～四〇頁、一九四一年再刊）に「雨ニモマケズ」が引用されている。松田は、宮澤賢治の思想が「農村」への積極的な作用を強調し、福田も「雨ニモマケズ」に描かれた理想的な農民像が「満州」という広大な農地の開拓に寄与することを期待した。

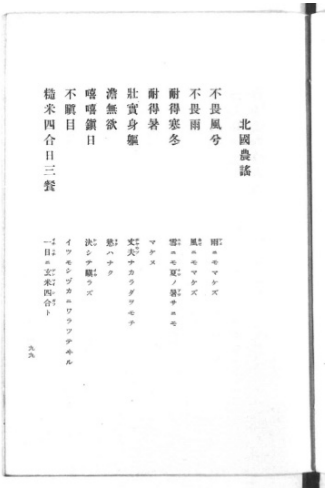

北國農謠
不畏風兮　雨ニモマケズ
不畏雨　風ニモマケズ
耐得寒冬　雪ニモ夏ノ暑サニモ
耐得暑　マケズ
壯實身軀　丈夫ナカラダヲモチ
澹無欲　慾ハナク
嘻嘻銷日　決シテ瞋ラズ
不膺目　イツモシヅカニワラフテヰル
糙米四合日三餐　一日ニ玄米四合ト
九九

図1

宮澤賢治「雨ニモマケズ」、銭稲孫訳「北国農謠」、一九四一・四、北京近代科学図書館編、『日本詩歌選』、日本・文求堂書店、定価一圓二十銭、九九頁。

このような背景において、銭稲孫による「雨ニモマケズ」の漢訳のタイトルが「北国農謠」であり、農と北の要素が付加されていたことは注目に値する（**図1**）。森荘已池の『宮沢賢治の肖像』には、「漢訳」の「雨ニモマケズ」が満州奉天で米の供出に一役買ったという話を聞いたことや、銭稲孫の訳が原作よりもりっぱに見えたことが記されている。[10] 日中戦時下における「雨ニモマケズ」の翻訳と越境は農地への侵入とその開発と物資の略奪にも使われていたのである。

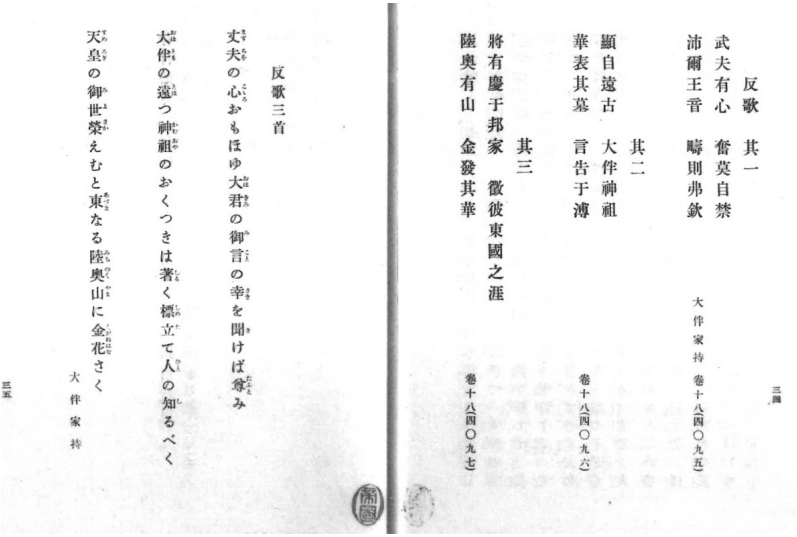
同時に、銭稲孫訳の『萬葉集』の幾首も一九四一年四月発行の同書『日本詩歌選』に収録されている（**図2**）。その中で、大伴家持の「賀陸奥国出金詔書哥一首并短歌」の「反歌　其一」は以下のように翻訳されている。

丈夫（ますらを）の心（こころ）おもほゆ大君（おほきみ）の御言（みこと）の幸（さき）を聞（き）けば尊（たふと）み

大伴家持　巻十八（四〇九五）

漢訳：武夫有心　奮莫自禁　沛爾王音　疇則弗欽

小松靖彦によれば、『萬葉集』の「ますらを」は「武具を帯びた雄々しい武人」という観念を持っているが、[11] 漢訳では銭稲孫はそのまま「武夫」と翻訳している。「ますらを」の「武力」の要素が文字化され、表現されている。また、原文にはない「奮莫自禁」という内容が補填されている。大君の御言の幸を聞け



反歌　其一
武夫有心　奮莫自禁
沛爾王音　疇則弗欽

大伴家持　巻十八四〇九五

三四

其二
顯自遠古　大伴神祖
華表其墓　言告于溥

巻十八四〇九六

其三
將有慶于邦家　徵彼東國之涯
陸奥有山　金發其華

巻十八四〇九七

反歌三首
丈夫の心おもほゆ大君の御言の幸を聞けば尊み
大伴の遠つ神祖のおくつきは著く標立て人の知るべく
天皇の御世榮えむと東なる陸奥山に金花さく

大伴家持

三五

図2

大伴家持「賀陸奥国出金詔書哥一首并短歌」の「反歌」銭稲孫訳「反歌」、一九四一・四、北京近代科学図書館編、『日本詩歌選』、日本・文求堂書店発売、定価一圓二十銭、三四～三五頁。

ば、「奮い立って自分を禁ずることができなくて」尊み、と意味の増加が生じ、「武夫」が「王」に服従することの自発性も表されている。

萬葉歌の翻訳は後に『漢訳萬葉集選』として結実するが、その翻訳の経緯について、鄒双双は「日中戦争期という非常時における銭稲孫と佐佐木信綱の学術に対する熱意と努力を表し、日中文化交渉の知られざる一側面を物語っているということは言える」[12]と述べている。鄒双双は「文化交流」ではなく「文化交渉」の語を用いることで銭稲孫の複雑な立ち位置を捉えようとしているが、内容の選定から、翻訳の意味の変容まで、文化交渉では解釈しきれない力学が機能している。また、学術や文化交渉を超えた政治的な営みがそこに含まれていることは看過できないだろう。

一九四一年四月、日中戦時下の文士部隊として佐藤春夫は当時の周作人や銭稲孫を中心とした日華文人の交流を重視し、日華親睦の第一義は文人同士の真情の吐露からという意見を出し、「支那認識」のために彼らを社会がもっと重用するようになってほしいということもアピールしている[13]。文化交渉の過程には日華「親睦」という国家レベルの目的が潜在する。それは平等を前提とする「親睦」とは言えない。むしろ、日本側の「支那認識」のために中国の文人を重用したいということである。

国家共同体と密接に関わるものとして『萬葉集』や「雨ニモマケズ」は『日本詩歌選』に収められているのである。王への

奉仕精神も「マケズ」精神も、現実世界の戦争状態に好都合な思想である。また、「北国農謡」と「武夫」の翻訳のされ方は満州開拓や植民地侵略を連想させるような翻訳となっている。

戦時下の『萬葉集』翻訳は天皇・皇国・皇民・皇運など、天皇制と国体が強調される現象が少なくない。一九四三年三月刊の『月刊大東文化』掲載されている、服部空谷による「萬葉集短歌漢詩訳」にも以下のような翻訳がある。

柿本人麻呂原詞云。皇は神にしませば天雲の雷の上に廬せるかも。

漢訳：陵寝雲雷表。蒼生慕至仁。誰謂登遐去。天皇即現神。

海犬養岡麻呂原詞云。御民吾生ける験あり天地の栄ゆる時に遇へらく念へば。

漢訳：身生皇国土。自称皇国民。況遇清明日。熙和天地春。[14]

翻訳者である服部空谷はその理念について、「尽忠報国。滅私奉公。是皇国臣道。萬古不易也。余平生愛誦萬葉集。」と附言していた。戦時下に詠まれていた『萬葉集』では以上のように天皇や天皇制の讃頌が繰り返されている。以上の歌の選定は『愛国百人一首』によるものであると訳者が冒頭で記している。『愛国百人一首』の選定要綱の第四条は、愛国の範囲の拡大であると明確に規定していた。[15] また、「我が国」の特徴は、「皇国」であり、天皇の国であることと解している。天皇・皇国・皇祖を尊崇することや国土を礼賛することは愛国心の表れである。このような要綱に従い、日中戦時下に広く詠まれた『萬葉集』の歌やその翻訳は天皇制賛美が中心的なテーマとなっていることが見て取れる。

翻訳の再生性の点から見れば、翻訳者の言語の変更行為はある種の創作行為と見ることもできる。「北国」・「農」や「武夫」・「天皇制」といった要素の付加・強調が、戦意高揚・農本ナショナリズム・大陸開拓といった時局の要請を反映したのではないだろうか。戦時下の文人の交流と文化の宣伝は、上から下への強制力も帯びていることが看過できないと思われる。

四　男性性の前景化

戦時下に北海道出身の詩人小田邦雄（一九一二～一九六五）は宮澤賢治についての研究論文と随想的なものを多く発表し、全国の宮澤賢治研究にさきがけたと入江好之に評価されている。[16] 小田邦雄は評論に宮澤賢治と『萬葉集』の関係性を論じている。

萬葉集には古代民族の雄健な雄叫びや灼熱的な素朴な情熱といふものが多いが、人麻呂のこれらの作品には雄大な自然現象を目撃するがごとき雄渾な力強い格調の響きを聞く。この日本詩歌の血統として二、三「春と修羅」から例を引くならば、（引用注、以下、「岩手山」「高原」の引用である。省略）これらに含む内容は、豪壮な意欲、美しい

萬葉精神を繼ぐもの
（浪漫詩人宮澤賢治）
小田邦雄

図3

小田邦雄「萬葉精神を継ぐもの（浪漫詩人宮澤賢治）」『イーハトーヴォ』第一期創刊号、菊池暁輝編、宮澤賢治の会、一九三九・一一、五～六頁。

とすら云へる自然観、萬葉の秀歌に比肩して一歩もゆづらぬ雄大な響きを伝へて妙なるものがある。[17]

以上の文章は「萬葉精神を継ぐもの（浪漫詩人宮澤賢治）」（**図3**）と題され、一九三九年一一月に『イーハトーヴォ』創刊号に載せられた。菊池暁輝によって編集された「宮澤賢治の会」の月刊誌『イーハトーヴォ』第一期は一九三九年一一月から一九四一年一月まで、盛岡から刊行されている。宮澤賢治テクストの紹介、賢治の会の活動、宮澤賢治に関する思い出や、作品に関する評論など様々な内容によって構成されている。その中に、九州、樺太、南台湾、北支、満州からの寄稿も多数あり、また、この会誌は戦時下の中国の北方でも読まれていた。

一九四〇年三月刊行の第五号の後記には、北支の異境に『イーハトーヴォ』誌を待つという内容も記されている。[18]

小田邦雄は『萬葉集』の雄健な雄叫びや雄渾な力強い格調を日本詩歌の血統として評価し、また、その萬葉の秀歌と比肩するような詩歌として、宮澤賢治の「春と修羅」を挙げている。この評論は著書『宮澤賢治覚え書』に収録され、一九四三年一一月に弘学社によって、初版三〇〇〇部で発行された。このように内地と戦地の日本人が、小田邦雄の賢治評論を共有しているのであった。

一九三〇年代に、『萬葉集』は「忠君愛国」の精神を示す重要な古典の一つと明確に位置付けられたが、一九四一年の太平洋戦争開戦後には、〈殉国〉（天皇のために命を捧げること）の『萬葉集』像があった、と小川（小松）靖彦が論じている。[19]このような時代要請を受け、『萬葉集』の男性的な強さが打ち出されていた。『愛国百人一首』に選出された『萬葉集』にも男性の成功と武勇が強調されていく。

千万の軍なりとも言挙せず取りて来ぬべき男とぞ思ふ
高橋蟲麻呂

出典：萬葉集巻第六に出づ。（国歌大観番号九七二）

をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして
山上憶良

出典：萬葉集巻第六に出づ。（国歌大観番号九七八）

ますらをの弓末振り起し射つる矢を後見む人は語りつぐがね　笠金村

出典：萬葉集巻第三に出づ。（国歌大観番号三六四）

唐国に往き足らはして帰り来むますら武雄に御酒たてまつる　多治比鷹主

出典：萬葉集巻第十九に出づ。（国歌大観番号四二六二）

その「萬葉精神を継ぐもの」として評価された宮澤賢治の文学も、雄大さが焦点化された。宮澤賢治のテクストには、軍の要素の描写が少ないが、「農」や「勤労」のイメージが「雨ニモマケズ」「農民芸術綱要」の受容によって広がっていた。これもまた同じく男性性の強調に繋がる。

五　個人の感情から集団の無感情へ

戦争という特殊な状況下においては、個人の存在が矮小化され、軍人としての身分が個人の感情や個性を凌駕する。個人が軍令に服従する際には、個人の感情や価値判断を抑圧することが避けられない。自分なりの価値判断や情動で決めるべき個人の行動が、戦時中は上からの命令に支配されて無抵抗に服従するプロセスになる。軍令と一致する感情は許されるが、それ以外の感情は強制的な思想統制下に抹殺されてゆく。敵に対する同情、戦争に対する反対、軍令に対する疑問などが挙げられる。一方、軍人の身体や精神の両面を統制するために、「感情」は人を動かす重要な力として使われることも多い。『愛国百人一首』には父母を残して大君の御命令で防人として軍に従う歌も選ばれた。戦時下における個人の無力さを表している。

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母をおきて　丈部人麻呂

出典：萬葉集巻第二十、「天平勝宝七歳乙未二月相替遣筑紫諸国防人等歌」といふ中に出てゐる。（国歌大観番号四三二八）

ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふいのちは母父がため　神人部子忍男

出典：萬葉集巻第二十防人歌中に出づ。（国歌大観番号四四〇二）

宮澤賢治テクストと『萬葉集』も、このような戦時下における思想動員や感情処理に使われたのである。実際に戦場に行った学徒兵佐々木八郎は宮澤賢治の「烏の北斗七星」を読み、一九四三年七月六日（火）付の日記に、「僕はこの面ではノー文句に一身をお国のために捧げようと思う。戦に出て最も男らしい戦を戦って、その余の事は神の命に俟つばかりだ」[20]と書き残している。学徒兵佐々木が「烏の北斗七星」から感銘を受けた内容は、山烏と戦争の前夜に烏の大尉が星に対して祈ったセリフである。烏の大尉は戦争の前に、自己の判断や意思を無くし、星様に任せる。

その後の十月十五日（金）の日記には、佐々木は「しかも〝戦争〟の意義、〝国家〟の意味、そんなものを一応摑んで落ち着いて出られる僕は幸福者といっていい。安んじて大きな流れに身を任せる気持ちだ。[21]」と書いている。戦場において戦士たちは「戦争の意義」、「国家の意味」を考えたにもかかわらず、結果として大きな流れに身を任せることを選択した。要するに、個人の感情を集団の中に消失させているのである。

戦時下の軍隊という集団には「感情」は存在しない。従軍作家であった石川達三は『生きてゐる兵隊』という作品の中で、戦時下の日本軍が無感情に中国人を殺したことを記録している。

> 笠原伍長にとって一人の敵兵を殺すことは一匹の鮒を殺すと同じであつた。彼の殺戮は全く彼の感情を動かすことなしに行はれた。ただ彼の感情を無慙にゆすぶるものは戦友に対するほとんど本能的な愛情であつた。[22]

敵の生命に対しては無感情であり、戦友に対しては本能的な愛情がある。このような強烈な対比は戦時下における「感情」そのものの在り方を顕わにしている。さらに、小松靖彦は「太平洋戦争末期に、《ますらを》は特別攻撃隊員たちと〈銃後〉の人々を通じて、理不尽な〈死〉を感情的に受け入れるための原理として、強力な力を発揮したのであった[23]」と論じている。自己や親族の死を含めた遭遇を感情的に受け入れさせるための装置として、『萬葉集』の読まれ方も規定されていった。

このように、戦争によって、こちら側（味方）とあちら側（敵）の境界線が明確に引かれた。敵に対しては「感情」がなく、味方に対してのみ「感情」を持つ。不自然な死も正当化できる。自分と戦友の死について、大義名分によって正当化して昇華する。一方、敵については動物化や悪魔化によって、その生命の価値も否定する。戦争というシステムは、人間の理性を基底とする感情を回収してしまい、人間（どちら側も）の生命と尊厳そのものを無価値化していくと言えよう。

六　中央性と地方性

宮澤賢治テクストも『萬葉集』も戦時下に戦場で受容されていたが、その受容のされ方には差異もある。まず一点目として、中央の文化と地方の文化というイメージの差異である。『萬葉集』という書物は、天皇の統治する中央主権国家として完成されてゆく〈歴史〉を描いたと小川（小松）靖彦が述べている[24]。また、『萬葉集』は宮廷文学であり、貴族文学であることは争う余地もないと上野誠が指摘している[25]。

宮澤賢治の文学については、大島丈志[26]による農業に関する専門的な研究もあるように、土着的で、地方的な文学としてのイメージが強い。また、このような地方文学は「近代的な文学」と距離を置き、「日本の伝統」への回帰を謳った日本浪曼派にとって連帯感を呼び起こす存在となったと村山龍が論じている[27]。

『萬葉集』は中央的な存在として流布され、戦時下もその特性に応じるように、国家や天皇への民の忠誠心の育成に寄与していた。それとは対照的に、宮澤賢治と彼の文学は地方的な存在として、地方性、土着性、故郷、ノスタルジーの象徴として「外地」で読まれた。さらに、苛酷な大地で生れた作家の不屈な精神性も謳歌された。戦時下の満州開拓民は北の大地で働き、「北国農謡」と翻訳された賢治テクストを詠む際に、「王道楽土」であった植民地・満州をイーハトーブというドリームランドへとシフトさせた。現実世界と作中の「北国」という方向性が合致し、「農」という要素で愛郷心も呼び起こしうる。その土着性と農業との関わりは開拓民の勤労精神を鼓舞する効果を発揮したのである。

七　受容の諸様態

戦時下における『萬葉集』と宮澤賢治テクストの受容については、共通性が多いと同時にその受容の様態と過程には差異も存在している。まず宮澤賢治の場合、草稿という形で世に残された「風の又三郎」は一九四〇年に映画化され、一九四〇年から京城（現・ソウル）、満州、樺太、台湾でも上映された[28]。奉天放送局でラジオ番組「風の又三郎」が放送され、「満州日日新聞」で映画の上映が報道された。また、書籍化されたものも満州にて刊行された。一九四四年五月中旬に満州を訪れた森荘已池は以下のような証言を残している。

苛烈な戦争の末期で、内地では準官製のパンフレットがたくさん出て、国民の士気を、あおっていたときである。ワナにひっかかった鳥のように風にはね回る一冊を手につかんでみた。

風大哥／宮沢賢治原作／季　春明　訳／芸文書房　版

と、ミドリ色の表紙に印刷され、奥付には康徳九年（引用注、一九四二年）二月十一日発行定価八角五分とあった[29]。

夏は太平洋から、冬には北のシベリアから吹くアジアの季節風は、中国と日本に共通する気候であり、また架空の物語が「谷川の岸に小さな四角な学校」を舞台にすることも、物語の普遍性に寄与している。現地の日本人は宮澤賢治の映画「風の又三郎」（一九四〇年公開、監督：島耕二、日活多摩撮影所が児童劇団東童と提携制作）を渇望していた。「風の又三郎」の映画化によって、童話作家として人気を獲得した宮澤賢治の作家イメージも形成されていた。

戦時下に植民地であった満州でも上映された「風の又三郎」には、教育的局面――上映前の敬礼、宮城遥拝、「海ゆかば」「愛国行進曲」といった唱歌合唱、国旗のクローズアップが挿入されたと米村みゆきが指摘している[30]。受容のされ方が違うものの、その映画に挿入された教育理念は『愛国百人一首』と本質的な目的の面では合致していると言えよう。

同時に、漢訳の「風大哥」も満州の中国人に受容されていっ

た。架空の舞台における物語の展開には、ノスタルジーとユートピアの賛美が中心のテーマとなっている。このような故郷や大地に対する憧憬は地域や国家を超えて、一種の人間の普遍的な感情でもある。日本的という明確な属性を持たないことによって、かえってこのような児童文学を以て宗主国と植民地の間に文化的共同体を創出する欲望が潜められている。『萬葉集』の「漢訳」やその流通も同じ効果をもたらしていた。

要するに、戦時下の植民地における日本文学の日本的な色を薄めさせ、その文化的共通性を強調しようとしたのである。勤労・不屈・愛郷などの普遍的な価値観が重要視されると同時に、「漢字」を持つ言語的な共通性も利用された。このような理由で、宮澤賢治の「雨ニモマケズ」は戦場にて中国語に翻訳され、またその中国語版の「雨ニモマケズ」を『イーハトーヴォ』誌を通じて銃後の日本人に紹介することが可能となった。文化的な一体化は戦時下の「雨ニモマケズ」の「漢訳」にも見られる。さらに、その詩歌は朗読の題材として使われたこともあった。

戦時下に『愛国百人一首』の受容者がその詩歌を読んで国家のために戦うという戦意を高揚する効果が編集側に期待されていた。それと似たように、「雨ニモマケズ」の受容者である満州開拓民に勤労奉仕の行動、さらに現地の農家に食糧供出という現実的な効果が権力者に期待されていた。

満州国奉天在の県の協和会の事務所が、県全体の農家に「雨ニモマケズ」漢訳のチラシをくばった。「隣人日本は、いま食糧不足で、飢えに泣く。たくさん供出して日本に送ろう」と書いてあったのである。[31]

つまり「漢訳」には満州の農民が読む際に、彼らが糧食を供出することを期待する現実的な目的も附言されていた。戦時下の紙不足の中、何万枚も印刷されたと森荘巳池は回想している。そして、「満州建国大学」では宮澤賢治の「精神歌」が合唱され、「愛唱歌」となっていたことも明らかにされている。[32] また、松田甚次郎や福田清人などによる大陸開拓をめぐる文学作品には「雨ニモマケズ」がよく引用されている。

このように戦時下の中国では宮澤賢治テクストは書物という形を超えて、歌・音声・映像・パンフレット・チラシ・翻訳など多様な形で流布していった。宮澤賢治の作った「花巻農学校精神歌」も文字・音声・朗誦など多様な形で受容されていた。また、宮澤賢治も『萬葉集』も一種の精神性の代表として賞賛されていた。だが、これらの受容の形式は無論『萬葉集』の流布にも表れている。

一方、戦時下に『萬葉集』が受容されていく過程は、読まれる対象であると同時に詩歌を創作する時の一つの模範でもあった。『萬葉集』は「萬葉調」という権威的な和歌の作風も保有していることで、その作風を模倣した創作が戦時下においても行われた。それは、戦時下における宮澤賢治テクストの受容と

『萬葉集』の受容のされ方の大きな差異として指摘できよう。一九二六年から一九七五年まで各種の歌集や同人誌に発表された短歌を収録した『昭和萬葉集』（一九七九～一九八〇年）は講談社によって全二〇巻に渡って刊行された。その膨大な創作者は戦場に赴く兵士、兵士を戦場へ見送る家族、戦友の死に直面した戦闘員など、その時代に生きた個人である。こうした人々が「萬葉調」を継承した上で、『萬葉集』に付与された「愛国精神」をも継承したことは、以下の短歌から読み取れる。

国のため戦争に出づるますらを親は人混みにもまれて行きぬ　加藤とみ子　明四四～　『白き石』（二一八）

映り出し慰霊祭の場面にわが前の人素早く帽子をとりぬ　金石淳彦　明四四～昭三四　『金石淳彦歌集』（三五）

戦友の手に抱かれつつ暗き夜に護国の神となりてかへりし　荒沢四一郎　大七　「橄欖」（一三・三）[33]

また、このような戦時下に作られた個人の歌の中に戦争と人間をテーマにした短歌を選出した『昭和万葉集秀歌〔一〕―戦争と人間』（島田修二編、講談社現代新書、一九八四年）もある。その短歌にも戦争という時代の人間と国家の関係性が表れ出ている。

改訂の小学読本巻五には建国神話の多くもられあり　清水　信　明三三～昭三五『都市計画』（七）

国のため出で立つ吾子の朝がれひ鯛の焼物つけてやりけり　中田清次　明三八～昭四五「国民文学」（七・二）

国民よ国をおもひて狂となり痴となるほどに国を愛せよ　西田税　明三四～昭一二〈澤地久枝『妻たちの二・二六事件』（四七）より〉[34]

また、山口志郎によって編集された『太平洋戦争　将兵万葉集』（一九九五年三月、東京堂出版）もある。中には『愛国百人一首』の選定委員を務めた斎藤瀏の歌も多数収録されている。一九三二年の第一次上海事変では上海北郊の堅陣の鉄条網爆破のために、決死の三人が銃火を冒して破壊筒を挿入し、三人は自身の肉体もろとも爆弾で飛散した。この爆弾三勇士と称される事件や二・二六事件などについて、斎藤瀏は以下の短歌を詠んだ。

戦ふも戦はざるも死ぬべくば我等男子は戦ひ死なむ

虚空に声あり吾を呼べり間を置きて聞ゆ天皇万歳

国危うしとく備へよと起ちたりし益荒夫の輩は行方しらずも[35]

このような歌は、戦争のために献身した兵士を賛美するものとなり、また天皇や国家のために戦場に行く義務をも詠み込んでいる。ほかにも、大谷晃一は戦時下に懸命に『萬葉集』を読み、歌を作り続け、『婦人之友』や『婦人朝日』の歌壇に投稿し続けたと回想する。[36] このように戦時下には短歌という媒介を通じて、戦場に行った兵士から銃後の人間たちまでが自分の心

情を詠んでいた。『愛国百人一首』の萬葉歌や「愛国精神」の受容者による歌の新たな「創作」という行為が行われていたことが分かる。『昭和萬葉集』には、受容する側の個人的な見聞に基づく創作の詩歌が多い一方、「愛国精神」も強く継承されているという特徴も見られると言えよう。

まとめ

戦時下における文学テクストの機能を考える際に、国家権力との接続が日本文学報国会などの組織の活動によって要請されていた。そして「伝統」という名の元でその要請は正当化されていった。さらに翻訳や越境というプロセスを経て、国家のために戦う兵士と共に戦場へともたらされる。このような共通性は『愛国百人一首』に収録された『萬葉集』の歌や宮澤賢治の「雨ニモマケズ」に見られる。戦争というシステムは国のために献身する精神を帝国の男子に求める。このような歴史空間下において、『萬葉集』も宮澤賢治テクストも男性の雄健を強調するような形で再編成されていった。結果、個人の感情――死に対する恐怖、家族と離れる悲しさ、殺人という行為に対する抵抗心、戦友の死に直面する動揺など――が軍隊という集団や国家共同体という強力な存在によって回収されてしまう。個人の「感情」が集団の無感情へと転換されていくのである。以上のような『萬葉集』との接点があるがゆえに、宮澤賢治は「萬葉精神」を引き継ぐものとして高く評価され、戦時下における「萬葉精神」崇拝という評価軸に宮澤賢治は置かれていった。

一方、その両者に存在する差異も顕著と言えよう。宮廷的で貴族的な文化という性格を持つ『萬葉集』は「天皇」を中心とした中央政治を物語っている。一方、「日本精神」を前景化していく中、地方的で郷土的な文化の代表として宮澤賢治と彼のテクストが脚光を浴びるようになった。だが、上から下へと浸透していく文化も、地方から生まれた文化も、日本という国家の対外戦争に協力するような文化へとシフトされていく。その過程において、日本文学報国会という組織の存在が字面のとおり、文学を持って報国する役目を発揮していく。また、『愛国百人一首』に収録された『萬葉集』の歌も宮澤賢治の「雨ニモマケズ」も書物・歌・音声・朗読など様々な形式にて受容されたという共通性を有している。

上代から昭和まで継承されていたとされていた「萬葉精神」は戦時下の人々にも引き継がれた。具体的な受容のされ方としては、個人が短歌を創作するという行為が戦場でも銃後でも行われた。膨大な『昭和萬葉集』の詩歌には天皇制イデオロギーに影響された個人の思想や戦時下の無数の死が刻まれている。個人で短歌を作ることによって、愛国心という共同体の理想を謳歌しながら、そこには個々の人生体験を詠むという欲望も潜められているのである。一方、『昭和萬葉集』には敗戦後の昭和という時代に生き続ける人々の歌も収録されている。

満州の邦人引揚げの大車は北奉天に長く長く蛇行す
　　穀山松栄　明四〇～

シベリアに抑留と聞く夫の事思へど術なしハルビンを発つ[37]
　　鶴見英之　明三八～『磯鳥』（三七）

侵略され殺戮された中国人は被害者である。また、生き残った人々も精神的なトラウマを抱えながら生きていくしかない。一方で、戦争から帰ってきた日本兵士の精神的な傷痕もまた大きかった。政府が遺族の喪失感を利用し、戦死者を神格化するのではなく、戦争という暴力的なシステムの被害者として、認識し直すことが必要と思われる。また、現代において「文学と政治」、「文学と戦争」といったテーマを改めて提起する意義もあると言えよう。

大文字の歴史・公的な文章とは違い、文学は個人の内面な感受性と直接的に繋がるものである。その文学は、様々な世代・出身・人種・国籍・ジェンダー・ビジョンを持った人々が共鳴できるような内容（自由・尊厳・愛・希望など）を内包している。人々に広く共有されるこのような感性は、「大文字の歴史・公的な文章」に編入され、「権力」に取り込まれる際に、危険な力ともなる。

文学は個人的なものであり、文学の享受も、創作も、個人的で内面的な体験である場合が多い。文学テクストは「感情」の発散と整理・情動といった機能を果たす。一方、戦時下においては国家の統制によって文学の果たす役割は個人の「感情」を煽動する方向へと変わった。戦争の時代に生きた人々は内側の「感情」の抑圧と外部の規則の押し付けという両方の作用下に置かれていた。さらに、自由の精神の放棄・思考停止・献身的な死まで要請されていた。ポストコロニアルの時代を生きている人間はこのような負の文化遺産を理性的に見直す必要があるのではないか。戦争が侵略国と被侵略国の人間にもたらした影響を理性的に捉え直し、戦時下の文学の在り方を解明することによって、両国の人々の間に対話と交流が生まれる可能性も開けてくるのではないか。

注

（1）一九四二年五月二六日に情報局の指導のもとに結成された文学者の団体であり、会長は徳富蘇峰。一九四五年八月三〇日解散。

（2）選定委員に、次の十一名、佐佐木信綱、斎藤茂吉、太田水穂、尾上柴舟、窪田空穂、折口信夫、吉植庄亮、川田順、斎藤瀏、土屋文明、松村英一。

（3）本文中の詩歌は断りのない限り『定本愛国百人一首解説』（一九四三年三月、毎日新聞社）、『【新】校本宮澤賢治全集』（全巻、筑摩書房）に拠った。引用文中と図表の傍線・加点は、特に断りのない場合、引用者によるものであり、引用を略した部分については（上略）（中略）（下略）で示した。引用文中の漢字は基本的に新字に揃え、仮名遣いについては原文のままとし

た。また、ルビは適宜省略した。「支那」「満州」「大東亜共栄圏」など、今日の歴史研究および倫理意識に照らして適切とは言えない用語について、当該言説の歴史的意味を検討する趣旨で、特に注記することなく原文通りの表現としている。なお、張永嬌「中国における宮澤賢治の受容―戦前・戦中・戦後の変遷を辿る―」（『千葉大学人文公共学研究論集』第四〇巻、千葉大学大学院人文公共学府、二〇二〇・三、四九～七〇頁）も参照されたい。

（4）松田甚次郎「後記」『宮澤賢治名作選』松田甚次郎編、羽田書店、一九三九・三。

（5）品田悦一『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典』新曜社、二〇〇一・二、一四五頁〔新装版、二〇一九〕。

（6）長谷川如是閑「文化史から見た萬葉調復活―近代的教養と古典復興」『短歌研究』改造社、一九四四・一〇、一二頁。

（7）谷川徹三『雨ニモマケズ』日本叢書、生活社、一九四五・六、三頁、二一頁。

（8）藤井青銅『「日本の伝統」という幻想』柏書房、二〇一八・一二、一～一二頁。

（9）銭稲孫「「北國農謡」附記」『日本詩歌選』文求堂書店、一九四一・四、一三〇頁。

（10）森荘已池『宮沢賢治の肖像』津軽書房、一九七四・一〇、三三四～三三五頁。

（11）小松靖彦「《ますらを》の内在化―『萬葉集』の「ますらをと戦争短歌におけるその受容〈戦争と萬葉集〉―」『戦争と萬葉集』創刊号、戦争と萬葉集研究会、二〇一八・一二。

（12）鄒双双『「文化漢奸」呼ばれた男―万葉集を訳した銭稲孫の生涯』東方書店、二〇一四・四、一二四頁。

（13）佐藤春夫「日華文人の交流―周作人・銭稲孫両先生を語らんとして」（一九四一年四月執筆）『周作人先生のこと』方紀生編、光風館、一九四四・九。

（14）服部空谷「萬葉集短歌漢詩譯」『月刊大東文化』大東文化協會、一九四三・三、七～八頁。

（15）日本文学報国会編『定本愛国百人一首解説』毎日新聞社、一九四三・三、一一～一二頁。

（16）北海道文学館編『北海道文学大事典』北海道新聞社、一九八五・一〇、八四頁。

（17）小田邦雄『宮澤賢治覚え書』弘学社、一九四三・一一、一一～一三頁。

（18）菊池暁輝編『イーハトーヴォ』第五号、宮澤賢治の会、一九四〇・三、三四頁。

（19）小川靖彦『万葉集と日本人―読み継がれる千二百年の歴史』角川選書、二〇一四・四。

（20）佐々木八郎『青春の遺書　生命に代えて　この日記・愛』藤代肇編、昭和出版、一九八一・八、三七三頁。

（21）前掲、佐々木八郎『青春の遺書　生命に代えて　この日記・愛』、三九六頁。

(22) 石川達三『生きてゐる兵隊』河出書房、一九四五・一二、四五～六〇頁。
(23) 前掲、小松靖彦「《ますらを》の内在化―『萬葉集』の「ますらを」と戦争短歌におけるその受容〈戦争と萬葉集〉―」、一五頁。
(24) 小川靖彦『万葉集　隠された歴史のメッセージ』角川グループパブリッシング、二〇一〇・七、七四頁。
(25) 上野誠『万葉集講義』中央公論新社、二〇二〇・九、一四七頁。
(26) 大島丈志『宮沢賢治の農業と文学　苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林、二〇一三・六、二四五頁。
(27) 村山龍『〈宮澤賢治〉という現象―戦時へ向かう一九三〇年代の文学運動』花鳥社、二〇一九・五、二五六頁。
(28) 米村みゆき「第三章　Marking of　風の又三郎―文部省の戦略と映画教育」『宮澤賢治を創った男たち』青弓社、二〇〇三・一二、九三頁。
(29) 前掲、森荘已池『宮沢賢治の肖像』、三三三頁。
(30) 前掲、米村みゆき「第三章　Marking of　風の又三郎―文部省の戦略と映画教育」、一〇二頁。
(31) 前掲、森荘已池『宮沢賢治の肖像』、三三四頁。満州における「風の又三郎」受容には、作家古丁が社長を務める藝文書房が大きな役割を果した（近藤健史「海を渡った宮沢賢治―北京・満州・上海―」『研究紀要』第二七号、日本大学通信教育部、二〇一四・三、一三～四六頁）。
(32) 山下聖美「第二次世界大戦中、及び敗戦直後における宮沢賢治受容」『藝文攷』第六号、文藝攷編集委員会、二〇〇一・二。
(33) 『昭和萬葉集』巻四、講談社、一九七九・八、一〇一頁、一二八頁、一三七頁。
(34) 島田修二編『昭和万葉集秀歌〔一〕―戦争と人間』講談社、一九八四・一一、一〇～三八頁。
(35) 『太平洋戦争　将兵万葉集』東京堂出版、一九九五・三、三～八頁。
(36) 大谷晃一「東満の荒野を越えて」『昭和萬葉集』巻七、講談社、一九七九・四、八頁。
(37) 『昭和萬葉集』巻七、講談社、一九七九・四、七四頁、七五頁。

【付記】本稿は第26回戦争と萬葉集研究会（二〇二一・三・六）での報告ペーパーを大幅に加筆・修正したものである。研究発表と論文執筆に対し貴重な御助言をくださった小松靖彦氏と大原祐治氏に厚く御礼申し上げる。同研究会の皆様に有益な御意見をいただき、記して感謝申し上げる。

（ちょう・えいきょう／上海大学外国語学院日本語学部講師）